

「第4回 日本の平和と繁栄、安全を考えるセミナー」報告書

安全保障研究部会

開催日時)

2018年9月22日(土) 13:30 ~ 17:00

開催場所)

日本大学通信教育部第31大講堂(3階)

開催テーマ)

——内と外から見た中国——

演題・講師

内から見た中国 ——トイレ革命の視点から——

山本 忠士 講師 吉林師範大学客座教授

日本大学大学院非常勤講師

日本が中国の「自治区」にならないために

——敵を知らず己を知らざれば戦う毎に危うし——

森 清勇 講師 星槎大学非常勤講師

開催の挨拶

日本国際情報学会を代表し、近藤大博会長によるご挨拶。



日本国際情報学会 近藤大博会長

講演要旨

1 内から見た中国 ——トイレ革命の視点から——

中国という国は 4000 余年といわれる長い歴史、56 の民族からなる 14 億に近い人口、日本の 26 倍という国土を持つ、懐の深い国である。

現在は、経済発展が著しく世界第 2 位の経済大国であり、同時に軍事強国を標榜する大国でもある。

少し前までは、中国経済が限界に達して、経済破綻が今にも起こりそうな見方が日本で大勢を占めていた。しかし、競争社会の醸し出す巨大なエネルギーは、社会変革を推し進めてもいるのが現状である。中国経済の限界や危機を予測する人もいるが、日本への旅行者が 700 万人であることをみても、前進のパワーは弱まっているとは思えない。

実際に中国・東北地区に 8 年暮らしてみても、北京や上海という都会ではないが、平均的中国人と接し、日本で考えていた見方とは少し違った印象を受けている。

内から見た中国ということで、トイレ革命と銘打って、実際に肌を感じたことを伝えていただきました。



講師 山本忠志先生

2 日本が中国の「自治区」にならないために

——敵を知らず己を知らざれば戦う毎に危うし——

中国は古来、日本と非常な関わりを持ってきた国である。中国はいまも『孫子』の国で、困ったときには日本や米国などに近寄り懐柔する。覇権を求めない、平和を指向する中国と言って、日米などの支援を受けてきたが、今はまっしぐらに覇権を求める国である。

中国が強大化して覇権を求めるようになったのは、鄧小平が言っていた「力がないときは外国の支援を仰ぎ、その間は研ぎつつある爪を隠しておく」という「韜光養晦」戦略の結果である。

孫子は「敵を知り己を知らば百戦危うからず」と言うが、また「敵を知らず己を知らざれば戦う毎に危うし」とも言う。

実際のところ、日本人は相手だけでなく己を知らないことも多い。その結果、南京掃討戦や慰安婦問題でトンデモナイ嘘が世界に撒き散らされてきた。

本講演では主として中国と日本を対比しながら話を進められ、日中の存亡に大きく関わるのは米国でもあるから、後半では米国も加味した考察が行われた。



講師 森先生



活発な質疑応答

質疑応答後、懇親会が盛大に行われ、途切れることのない議論が交わされた。

今回で4回目のセミナーですが、今回も盛況の内に終了いたしました。会を重ねるたびに、出席者の熱気を感じることができました。

日本国際情報学会に興味を持たれた方も多く、学会の良きPRにもなりました。

以上